

## 〔教育実践研究〕

## 小児科外来実習からの学生の学び

長谷川 桂子 石 井 康 子

Student's Learning from Child Nursing Practice  
at Open Part of Pediatric Department

Keiko Hasegawa, Yasuko Ishii

## I. はじめに

医療施設において看護の対象となる小児は、健康上の問題のために入院をしている子どもだけではない。健康上の問題の有無にかかわらず、医療施設を訪れるすべての子どもが対象である。また、対象の特徴から子どもを取り巻くその家族も看護の対象になる。このような子どもとその家族が医療施設を訪れる場合に、最初にかかわるのは外来である。平成17年度に行われた調査によると、看護系大学において小児看護学領域で外来実習を行っているのは40%弱であるとの報告がある<sup>1)</sup>。

岐阜県立看護大学看護学領域別実習の小児病棟実習では、平成17年度から病棟実習を行う施設の小児科外来で、1日の実習を行うことを計画して進めてきた。学生は1日間の限られた実習時間の中で、小児科外来を受診する子どもやその家族と間近に接して、会話や観察する機会を得ている。その中で、子どもの疾患や成長発達、家族の抱える子どもの健康上の問題などを、病棟とは違う視点で学習できると考えている。また、小児科外来実習を通して、健康に問題のない子どもも含めて子どもが健やかに育つための支援も外来では行われており、その現状の理解も可能であると考えている。

本研究では、小児科外来実習における学生の学びの内容を明らかにし、小児科外来実習の評価を行う。そして、今後の小児科外来実習の改善に向けた課題を検討することを目的とする。

## II. 小児科外来実習の概要

本学3年次生が看護学領域別実習で履修する小児を対象とした小児領域実習の目的は、小児看護の特徴と役割を理解し、適切な看護が実践できる基礎的な能力を養うことである。実習期間は医療施設で10日間、小・中学校では2日間である。平成17年度から、医療施設の実習では10日間の病棟実習期間の間に、1日間の小児科外来（以下、外来という）における実習を行っている。

小児科外来実習（以下、外来実習という）の目標と学習内容は表1に示すとおりである。外来実習の学生配置は、病棟での受けもち患者の実習をできる限り中断させないように、学生の学習状況を見て病棟の実習指導看護師と教員が判断をして決めている。外来実習は1日に1～2名程度が行うようにし、外来の実習指導看護師が主に指導を行っている。外来実習に入るにあたり、小児病棟実習2日目に、30分程度の外来オリエンテーションを全員が実習指導看護師から受けている。実習における学習内容については、実習指導看護師と実習開始前に検討を行っている。大学からは、学習内容の達成のために、午前中に1組の受診する子どもと家族の外来

表1 小児科外来実習の目標と学習内容

実習目標	外来での小児看護の実際を理解する
学習内容	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 小児が受診に至った過程を知る</li> <li>2. 受診時の親子のかかわりを観察し、小児の疾患と家族の心配や気持ちを理解する</li> <li>3. 医師や看護師が小児と家族に対応する様子からそのかかわり方を学ぶ</li> <li>4. 外来での受診の流れを知り、看護師の役割を考える</li> <li>5. 外来看護の役割を考える</li> </ol>

受付後から会計を済ませるまで、学生に付き添わせてほしいと依頼している。付き添いを依頼する子どもと家族には、実習指導看護師と学生から依頼して了解を得ている。午後は専門外来で継続してフォローされている子どもと家族を対象に実習をしている。子どもと家族に付き添う時間以外の実習内容は、事前学習をしてきた看護援助内容（例：計測、処置の介助など）についての見学や、できる範囲内で援助の経験をするようにしている。

実習記録は、病棟実習で記載する毎日の記録用紙に、あらかじめ提示している学習内容について記載をするように事前に説明をしている。記録用紙の提出は原則として外来実習の翌日である。

なお、実習に入る前年の4セメスターに、小児の外来看護に関する講義を45分程度行っている。そこでは、小児の外来と外来看護の特徴について説明し、小児の外来看護をテーマに作成された25分程度のVTR<sup>2)</sup>の視聴をしている。

### Ⅲ. 方法

#### 1. 研究対象

平成18年度A病院小児科外来で実習を行った学生23名のうち、研究に同意の得られた20名が外来実習終了後に提出した実習記録の記述内容を対象とした。

#### 2. 記録用紙の内容

記録用紙はA4判1枚で、行動計画、実施した看護の内容と評価、反省・感想を記載するようにさせた。実施した看護の内容と評価には、実習要項に記載された実習目標を達成するための学習内容を念頭において、記載することを説明した。記載にあたって、学習内容が含まれていればその方法は問わないことと、記録用紙が不足するときは、裏面を使用しても良いと説明した。

#### 3. 分析方法

学生の学びを分析するため、実施した看護の内容と評価に記載された記述内容の学びに着目し、意味のある文節を取り出した。これを1つの意味のある文節に分け、意味内容を要約して1データとした。1データに要約した内容の類似するものをまとめてサブカテゴリとし、さらに抽象化してカテゴリとした。この作業は、研究者間で合意が得られるまで繰り返し検討した。

#### 4. 倫理的配慮

小児領域の実習後に行う、まとめのためのカンファレンス終了後に、外来実習記録の内容を研究に使用することについて説明をした。説明は、研究目的、研究への同意の有無が成績に影響しないこと、プライバシーの保護などについて口頭と書面で行った。外来実習記録の使用の許諾可否について承諾書の提出を求め、承諾の得られた記録物を対象とした。なお、この研究は岐阜県立看護大学倫理委員会研究倫理審査部会の承認を得て行った。

### Ⅳ. 結果

20名の学生が提出した外来実習記録の記述から、学びの内容について303のデータを抽出し、さらに意味内容に沿った分類を行った。その結果は表2に示す。データを分析した結果、学びの内容は『子どもの理解』『家族の理解』『看護活動の理解』『外来の理解』『医療者の理解（看護師を除く）』『その他の理解』の6カテゴリに分類された。

分類したデータは学生が実際に実施や観察した事実（以下、事実という）と、その事実を通しての考え（以下、考えという）に分けることができた。

外来実習記録からみた学生の学びは以下のようであった。

#### 1. 子どもの理解

『子どもの理解』には41の記述があり、そのうち考えの記述は20であった。『子どもの理解』は「成長発達にかかわる子どもの理解」「処置に対する子どもの反応の理解」「その他の子どもの理解」で構成された。

学生は「成長発達にかかわる子どもの理解」として、子どもがじっと待つことが難しく、ほめられると頑張ることができることや、見知らぬ人に出会ったときの子どもの反応を理解するなど成長発達にかかわることを学んでいた。また、外来で行われる苦痛を伴う「処置に対する子どもの反応の理解」として、子どもが大声で泣く、処置を怖がるなどを観察し、子どもが納得して処置を受けることが難しいこと、処置時に子どもが協力できると苦痛が軽減できることなどを学んでいた。「その他の子どもの理解」では、つらい経験は子どもの中にトラウマとして残ること、親子のかかわりを観察する中で、子どもの親に対する愛着が捉えられるなどであった。

表2 小児科外来実習からの学び

カテゴリ	サブカテゴリ	記述内容の要約例	記述数
子どもの理解 (記述数:41)	成長発達にかかわる	子どもは学生を見て、はじめは泣きそうな顔をして背を向けた	17
	子どもの理解	子どもは同じ場所で待っていることができないこともあるので配慮がいる	
		子どもはほめられると、うれしそうにして静かに待つことができる	
	処置に対する 子どもの 反応の理解	子どもは行動レベルで指示されると協力できる	16
		子どもは処置時に協力することで苦痛・不安・痛みが軽減するように見えた	
		子どもが静かに出来ないの、検査は中止になった 抑制をすることは子どもの恐怖心を増強させると思う	
	その他の子どもの理解	子どもはかかわりの中で目を合わせると素直にきいてくれる	8
		親子のかかわりの観察から兄の親への愛着を捉えられた	
		子ども(2歳)は入院したときの思い出があり、診察室を怖がった	
家族の理解 (記述数:66)	家族の心配や安心にかかわる内容	家族の不安は、予後や後遺症に関してが多かった 家族は子どもの少しの変化でも不安になることがわかった 家族にはわからなくて不安なことがあるとわかった 診察時に、検査結果に異常がなかったことで母親はほっとしていた	23
	家族の子どもに対する対応	家族は子どもが注射を頑張ったことほめていた 子どもの吸引は両親が協力して実施していた 母親は待つことを予測しておもちゃを持って受診し、時間をすごしていた	10
	家族の受診に向けての調整	家族は長い待ち時間や安全などのために受診に付き添いの調整が必要である 父親は仕事を休んで受診に同行していた 家族は子どもの受診のために生活や仕事を調整していた	7
	家族の医療者への確認内容	質問は日常生活にかかわるものが多かった 家族はキャンプに行くときの酸素療法の扱いについて質問していた	5
	家族の困難	母親は子どもが病気になる家事と用事を両立しなければならない 子どもの点滴中、母親は常に注意しているので疲労が大きい 子どもの入院の決まった母親が、付き添いができないことで困っていた	5
	家族の希望	家族は子どもが診察中に、下の子どもを見てくれる場を希望していた 家族は、発熱が続くので検査を希望していた	4
	その他の家族の理解	母親はだんだん強くなり、子どもの疾患を前向きに考えられるようになる 長期に受診している家族は、医師を信頼し、言いたいことを話していた 親子のかかわりの観察から、親の子への思いがわかった 家族は子どもの普段の様子をよく観察していた	12
	処置にかかわる内容	処置時は看護師の態度や声掛け、その場の雰囲気などが大切である 子どもの年齢に合わせた方法で採血をしていた 家族に処置の目的や注意事項とその理由を判りやすく伝える必要がある 安全に処置を受けてもらうことが大切である 処置室が子どもの恐怖にならないようにすることが大切である	23
	子どもにかかわる内容	処置後のかかわりが子どもの成長発達にいい影響を与える 子どもの成長の経過を見て家族に声かけをしていた 泣きそうな子どもに子どもの発達に合わせた声をかけていくことが大切である 子どもに安全に処置を受けてもらうことが大切である	20
看護活動の 理解 (記述数:97)	家族にかかわる内容	子どもの回復に向け、家族の不安などに継続してかかわることが大切である 在宅生活の状況を理解して、援助することが大切である 看護師が気軽に声を掛けることで、安心して相談もしやすくなる	20
	外来運営	診察や処置の雰囲気をよくすることも看護師の役割である 待ち時間が短く、円滑に診察を進めるようにできるとよい 待ち時間を少なくするため早めに計測をし、家族とかかわり援助を考えていく	10
	診察にかかわる内容	プライバシーの保護について援助をする 子どもが泣くと診察の介助のため診察室にいく	7
	対象にあわせた援助	家族と兄の背景を考えた対象にあった援助が生活を支えることになる 成長の変化などのよい点を家族に伝えながらコミュニケーションをとっていた 問題はさまざまなので、子どもと家族にあわせた援助が必要だと感じた	7
	その他の看護活動の理解	看護師はどんな患者がいつくるかわからないので、知識や技術が必要である 外来は病棟と連携して継続受診児を診ていた 家族と兄の不安の軽減や理解が深まるように医師との間に介入することである	10
	外来環境にかかわる内容	診察室や待合室は子どもが楽しめるように工夫されていた いつ診察に呼ばれるかわからないので、場所を離れられない 外来は子どもや家族の交流の場のひとつでもある	15
	受診にかかわる内容	子どもの受診の付き添いは両親である 対象の子どもの年齢は乳児から小学生と幅が広がった 外来受診は家族にとって、子どもの健康を守るために大切である	12
	外来看護にかかわる内容	短時間で情報を得るためには観察力と気付きが必要である 慢性期の患者に治療の継続と自己管理をできる支援が必要である 短時間でアセスメントをして看護をしていた	8
	その他外来の理解	どんなことにも対応する外来は子どもと家族にとり、大きな存在である ハイリスク児をいつでも受け入れる体制をとることが必要である	4

表2 小児科外来実習からの学び (つづき)

カテゴリ	サブカテゴリ	記述内容の要約例	記述数
医療者の理解 (看護師を除く) (記述数:32)	医師の役割	診察時、医師は家族が質問などに納得するまで説明していた	14
		医師は普段の子どもの生活の様子を聞き治療方針につなげていくのがわかった	
		医師は何でも相談できる体制を整えていた	
	対象にあわせた対応	医師は子どもに合わせた指導や説明をしていた	13
		医師は子どもに疾患以外の関心事のこと含めて話しをしていた	
その他の理解 (記述数:28)	その他の医療者の理解	医師の診察を見学して、子どもの様子を把握する方法を学んだ	5
		医療職者の一言が子どもと家族に与える影響は大きい	
	在宅生活にかかわる内容	診察室を子どもや家族が思いを表出しやすく調整することは医療者にとって重要である	5
		在宅生活をサポートしている人的資源を理解した	
		在宅生活について聞き、母親の負担が大きいと感じた	
その他の理解 (記述数:28)	学生のコミュニケーション	子どもの生活の場が自宅や学校であることを踏まえて子どもを見る必要があると考えた	3
		家族の質問に対して、不安をあおらないように注意して話しをした	
		家族とかかわるとき喜びに感じることから始めて、話が弾んだころに、苦労や不安について聞くようにした	
	家族と医療者の良好な関係形成	家族と医療者のよい関係は、子どもにも伝わるように感じた	2
	受診に至った過程の理解	対象児は川崎病の後遺症を早期発見するために定期受診していた	18

## 2. 家族の理解

『家族の理解』は66の記述があり、そのうち考えの記述は26であった。『家族の理解』は、「家族の心配や安心にかかわる内容」「家族の子どもに対する対応」「家族の受診に向けての調整」「家族の医療者への確認内容」「家族の困難」「家族の希望」「その他の家族の理解」で構成された。

受診について来た家族と接する中で、多くの学生は家族の心配や安心を捉えていた。学生の捉えた「家族の心配や安心にかかわる内容」は、疾病の予後や後遺症であったり、子どもの少しの変化でも家族が心配することなどであった。そして、家族により心配はさまざまで、慢性疾患の子どもの場合、いつもと少し様子が違うと家族は気になり、心配や不安が強いと学生は捉えていた。また、医師の診察や検査結果などで、子どもの状態が思っていたより良いことを確認できると、家族が安心できることも学んでいた。「家族の子どもに対する対応」では、子どもが処置を頑張って受けたことを家族がほめること、母親が待ち時間に子どもが飽きることを予測して、受診していることなどを学んでいた。「家族の受診に向けての調整」では、学生は受診のために家族が仕事を休むこと、きょうだいの保育所への送迎などについて調整をしていることを学んでいた。学生は、家族が日常生活にかかわる集団生活の中での活動制限や、学校行事などについて医療者に確認していること、診察中にきょうだいの面倒を見てほしいと願っていることなども学んでい

た。「家族の困難」では、点滴をしている子どもに付き添っている母親の疲労の大きいことなどを捉えていた。「その他の家族の理解」では家族は時間をかけて子どもの疾患を前向きに捉えられるようになり、長い経過の中で医療者との信頼関係を築いていることを学生は学んでいた。

## 3. 看護活動の理解

『看護活動の理解』は97の記述があり、そのうち考えの記述は57であった。学生が記述した内容は、『看護活動の理解』が最も多く、「処置にかかわる内容」「子どもにかかわる内容」「家族にかかわる内容」「外来運営」「診察にかかわる内容」「対象にあわせた援助」「その他の看護活動の理解」で構成された。

「処置にかかわる内容」では、学生は処置時に、看護師が対象の年齢などにあわせて声をかけ、固定や方法などについて工夫しているのを観察し、声をかけることの大切さや、処置室が子どもの恐怖にならないようにする工夫を考える必要のあることなどを学んでいた。そして、子どもには、看護師の処置前や処置後のかわりが重要で、励ますことや、恐怖や痛みから気をそらすことの大切さを学んでいた。「家族にかかわる内容」では、家族の不安の解消に向けて継続的に働きかけることや、在宅での生活状況を理解して援助すること、家族が疾患などを理解して子どもとかかわれるようにすることが重要だと学んでいた。「外来運営」では、診察や処置を受ける子どもが好むキャラクターを、壁や天井に貼付するなどしてその場の雰囲気をよくすることや、外来診療がス



ムーズに流れ、待ち時間を短くできるようにすることが大切だと学生は捉えていた。そして、診察ではプライバシーの保護を考え、診察の進行状況を把握して医師と連携をとることが大切だと学生は学んでいた。また、子どもと家族の抱える問題はさまざまで、その子どもと家族にあわせた援助が在宅での生活を支えることになることと学生は学んでいた。「その他の看護活動の理解」では、看護師には知識と技術が必要であることや、病棟看護師との連携や医師や家族などへの介入調整が大切であると、学生は捉えていた。

#### 4. 外来の理解

『外来の理解』は39の記述があり、そのうち考えの記述は20であった。『外来の理解』は「外来環境にかかわる内容」「受診にかかわる内容」「外来看護にかかわる内容」「その他の外来の理解」で構成された。

「外来環境にかかわる内容」では、子どもが楽しめる工夫（DVD・ビデオ・キャラクターなど）が大切なことや、いつ診察などと呼ばれるか分からないので、家族と子どもは待ち合いの場を離れられない状況にあることなどを学んでいた。「受診にかかわる内容」では、学生は受診時の付き添いに両親など複数人を必要とする理由や、受診の対象年齢が幅広いこと、いろいろな疾患の子どものいることなどを学んでいた。「外来看護にかかわる内容」では、短時間で情報を得るために看護師には観察力と気づきが必要であることや、継続して受診している患者が自己管理できるように支援することが重要であると学んでいた。「その他の外来の理解」では、外来は家族と子どもにとって大きな存在であるなどを学んでいた。

#### 5. 医療者の理解（看護師を除く）

『医療者の理解』は32の記述があり、そのうち考えの記述は11であった。『医療者の理解（看護師を除く）』は「医師の役割」「対象にあわせた対応」「その他の医療者の理解」で構成された。

「医師の役割」では、医師が診察時に、家族が納得するまで質問などに判りやすく説明していること、子どもには疾患以外の子どもの関心事も含めて話をしていること、インフォームドコンセントがされていることなどを学生は学んでいた。「対象にあわせた対応」では、医師が説明時に対象にあわせて分かりやすく話していたこと、子どもの年齢により始めに子どもから話を聞き、その後

に親から話を聞くなどしていたことなどを観察して学んでいた。「その他の医療者の理解」では、医療者の一言の与える影響が子どもと家族にとり大きいこと、診察室を子どもや家族が思いを表出しやすい場に調整することが、医療者にとって重要であるなどを学んでいた。

#### 6. その他の理解

その他の理解は「在宅生活にかかわる内容」「学生のコミュニケーション」「家族と医療者の良好な関係形成」「受診に至った過程の理解」で構成された。

「在宅生活にかかわる理解」では、家族が自宅で医療的ケアを行っていることや、その生活を支える人的資源について学んでいた。コミュニケーションの方法では対象を不安にさせないように注意して話すことや子どもの心をつかむコミュニケーションのとり方などを学んでいた。また、「家族と医療者の良好な関係形成」では、家族と医療者の良好な関係が、子どもにも影響を及ぼすことなどを学んでいた。「受診に至った過程の理解」は、ほとんどの学生が記述をしていた。

### V. 考察

#### 1. 小児外来看護の理解

##### 1) 子どもと家族の理解からみた外来看護の理解

実習目標である外来での小児看護の実際を理解するには、『子どもの理解』と『家族の理解』が欠かせない。

子どもと触れ合う機会の少ない学生にとり、実習は子どもとじっくりかかわる機会である。外来には多くの子どもが家族とともに受診する。1日間の短い外来実習の中で、学生が子どもと家族にかかわることができるように、1組の子どもと家族に付き添う実習を取り入れている。また、付き添う子どもと家族のいない時間帯は、多くの対象である子どもと家族に接することができるように診察場面の見学や介助、看護師が援助する場面の見学や介助を経験をするようにして、対象を理解し学びを深められるようにしている。

学生の記述から、外来を受診する子どもの痛みを伴う処置場面を通して「処置に対する子どもの反応の理解」が多く抽出された。処置を受けたときに示す子どもの反応を理解し、その反応を軽減させる援助も理解できていた。そして、子どもの処置に対して、家族が子どもの頑張りを認めてほめていることや、看護師が子どもの年齢

にあわせて声かけや、方法を選択して実施していることも理解していた。子どもの処置には看護師の態度や声かけ、処置室の環境が影響することや、痛みや恐怖を伴う処置から子どもの気持ちをそらす援助が必要だと、学生は学ぶことができていた。そして、家族に対しては、処置の目的や注意事項を分かりやすく伝えることが必要であると学んでいた。学生は、子どもが痛みを伴う処置を受けるときに、看護師としてどのように援助したらよいかを、子どもと家族の両面から学ぶことができたと思う。この学びは、学生が子どもの理解を通して学んだ外来看護といえるのではないかと考える。

家族の理解では、「家族の安心や心配にかかわる内容」が多く抽出された。外来実習では、1組の子どもと家族に付き添うことで、子どもや家族とコミュニケーションをとる機会が多い。その機会を通して、学生は家族から受診に至るまでの不安な思いや、日々の生活の中での問題などを捉えて理解していた。これは学習内容の理解と一致する学びと考えられる。少子化の中、家族の子どもへの思いは概して強いことが多い。子どものことだから家族の心配や不安が強いことや、家族にとって分からないことが心配や不安へとつながることを学生は理解していた。また、在宅生活にかかわること、予後や後遺症にかかわること、子どもに起こる少しの変化なども家族にとっては心配なことで、その範囲の広いことも理解できていた。そして、学生は看護師として、家族の心配や不安を軽減することは重要であると学んでいた。家族が抱える問題について相談しやすい状況を看護師が作り、家族の話を聞くことが必要であることを理解できていた。これらから、学生は看護師として家族への対応の方法なども含めて学んでいたと考えられる。

## 2) 小児外来看護の役割の理解

小児外来看護を理解するには、子どもや家族の理解とあわせて、『看護活動の理解』と『外来の理解』が重要であると考えられる。学生は、看護師が子どもと家族の状況を把握して、処置などを含めた看護援助を対象にあわせて行っている事に関して多く記述していた。これは、これらの援助が外来実習で学ぶ機会の多いものだったことを示している。そして、学生が子どもや家族に対応する看護師の様子から、そのかわり方を学んでいることの現われと考えられる。学生は、子どもが怖がらない状況

で安全に看護援助を受けられるようにし、家族が安心を得られるような看護援助をすることが重要だと理解していた。学生はそのために、診察を待つ家族がいつ呼ばれるか分からないため、待ち合いの場を離れることに対して感じる不安を解消する工夫を含めて、子どもと家族が安心して待つことができるような外来環境の工夫の必要性があると学んでいた。そして、家族が子どもの安全を考えて、受診の付き添いを複数人に調整することもあると理解していた。しかし、感染症を含む多様な疾患で受診する子どもと家族がいる待ち合いの場は、子どもと家族にとり必ずしも安全とはいえない。学生の記述からは待ち合いの場などの環境に対する安全については、抽出することができなかった。外来では、対象の特徴から感染症に対して特に注意を払っている。しかし、看護師が感染や症状などから予測される危機へ対応するために行っている、トリアージにかかわる学びの記述はみられなかった。これらにかかわる学びの記述のみられなかったことは、今後検討が必要である。

学生は外来での看護は、一人ひとりの患者に対する短時間の看護援助で、その積み重ねが継続される必要のあることを学んでいた。そして、その間の在宅での援助を家族が行っていることや、その援助を行うにあたり家族が問題をもっていることに気づいていた。これは、看護師の援助場面からの学びと、家族とのコミュニケーションからの学びと考えられる。学生が付き添いをした事例には、心疾患や川崎病などで継続的なフォローのために受診しているケースもある。また、対象になった病院は、午後に小児の専門外来を開いている病院である。そのため慢性的な健康障害のある子どもが、継続して受診していることが予測され、その結果からの学びと考えられる。

小児科外来実習の学生の学びを加藤ら<sup>3)</sup>、石井ら<sup>4)</sup>、平元ら<sup>5)</sup>は研究している。これらの研究によると、学生が実習で学んだ小児の外来看護の役割は、子どもと家族が安心して診察を受けられる環境づくり、慢性疾患の子どもと家族の心理的負担への働きかけや保健指導、短時間での情報収集の必要性などであった。本研究でもほぼ同様の学びを学生はしていた。

## 2. 効果的な実習方法と外来実習の課題

外来実習の方法のひとつは、1組の受診する子どもと家族の受診過程を、学生と一緒に体験することであ

る。この体験により、学生は子どもが受診に至った経過や、そこに至るまでの家族の抱える困難などを把握していたことが記述から捉えることができた。これらの記述は、小児が対象の実習だから得られた学びといえるのではないかと考える。下村ら<sup>6)</sup>は、外来で患者とともに受診過程を体験する方法について検討し、日常生活を在宅で送っている患者の不安を学生に気づかせ、共感させる効果があることを明らかにしている。本研究でも同様に、健康障害のある子どもの在宅生活を支える家族の不安に、学生は気づく学びができていた。

1組の子どもと家族とともに受診過程を体験することは、対象により学びが異なると考えられる。それを補うために、外来場面でできる実習として、診察場面の見学や介助、看護師が援助する場面の見学や介助などを行っている。これにより、処置などにかかわる子どもや家族の記述や、看護援助としての記述が多くみられ、学びとして効果的であったと考える。外来における看護の理解をするために具体的な学習内容を実習前に提示している。学生は学習内容を理解して外来実習に臨み、今回の学びの記述ができたと考える。

学生の学びには、実施や観察した事実からの学びと、事実を通して考えたことの学びがある。この研究では、その両方を学びと考えた。『家族の理解』の記述では事実の記述が考えの記述に比較して多くみられた。事実の記述が多くみられたことは、学生がその場面に遭遇しても介入が難しく、考えを深められなかったことの現れではないかと考える。『看護活動の理解』では考えの記述が事実の記述に比較して多くみられた。これは学習内容に看護師の役割や外来看護の役割を考えることを提示していたため、考えの記述が多くなったのではないかと考える。記述が事実の学びに留まらず考えにまで及ぶように、学生を支援することは教員の役割である。学生が実施したり観察したりした事実の意味を共に考えることで、学生の学びは強化される。そのための機会を設けることと、提示している学習内容の見直しを検討する必要がある。

学生の学びからみた外来実習の課題は、処置にかかわる安全については学ぶことができたが、環境にかかわる安全やトリアージにかかわる看護師の判断を、学生が学べていないことである。これらに関しては4セメスター

の講義の中で取り上げてはいるが、学生の学びとして残るものではなかった考えられる。そして、外来では、看護師は気づいた時に判断をしてトリアージなどを行っているが、学生にはそれが見えていない状況だったと考えられる。看護師が判断して行動したことが学生に伝わるように実習指導看護師と調整をする必要があることと、4セメスターの講義内容の検討と、学生が講義での学びを想起できるように実習オリエンテーションについて改善する必要がある。

また、外来で行う看護活動には、子どもが健康に育つための支援も含まれている。今回の学生の記述には健康に育つための看護活動にかかわる記述はみられなかった。健康障害のある子どもや家族に対して看護師が行っている健康に育つための看護活動にも目を向けることができるように、実習指導看護師との調整や講義や実習オリエンテーションの検討が必要と考える。

### 3. 研究の限界

本研究は1施設の外来実習における学生の記述した記録のみを分析の対象とした。学生はすべての学びを記述しているとはいいがたい。そのため、学生の学びの全体を捉えるには限界がある。

## VI. まとめ

学生の外来実習の記録から実習における学びの内容を明らかにした。その結果、学びの内容は『子ども理解』『家族の理解』『看護活動の理解』『外来の理解』『医療者の理解（看護師を除く）』『その他の理解』の6カテゴリに分類された。そして、外来における看護の理解はほぼ達成できた。外来におけるリスクを判断した看護活動であるトリアージや、子どもが健康に育つための支援などについては、学生が行われている実際に気づかず記述がみられなかった。効果的な外来実習にするためには、1組の子どもと家族に付き添う実習と、外来で行われている看護援助場面の見学や介助を組み合わせる行うことが有効であると示唆された。

## 謝辞

本研究の趣旨を理解し、貴重な資料を提供してくれた学生の皆様に、お礼申し上げます。

## 文献

- 1) 大見サキエ, 片川智子, 宮城島恭子他: 小児看護学領域における外来看護の教育の現状—第1報 4年制大学—, 第16回日本看護学教育学会学術集会, 69, 2006.
- 2) 日本看護協会: 看護技術学習支援ビデオシリーズ 小児看護学3 生まれ変わる小児外来看護, 1998.
- 3) 加藤加代子, 中田美保子, 水澤晴代他: 小児科外来初診患者受持ち実習における学びの内容, 日本看護学会26回集録看護教育, 35-38, 1995.
- 4) 石井由美, 及川郁子: 小児看護学における外来実習について—外来実習の変遷と本学学生の実習の学びから—, 聖路加看護大学紀要, 22; 96-103, 1996.
- 5) 平元泉, 長谷部真木子, 野村誠子他: 小児看護学実習における外来実習の効果—外来実習導入前後の経験状況の比較—, 秋田大学医短紀要, 7; 33-40, 1999.
- 6) 下村裕子, 佐藤ヨリコ, 山下香枝子他: 外来看護の実習における患者と共に体験することの意味, 日本看護教育学会誌, 4(2); 106-107, 1994.

(受稿日 19年 5月 10日)

(採用日 19年 8月 6日)